クラス	TU110	担当教員	三橋　広夫
テーマ	世界に向き合う歴史教育		
著書・論文 研究課題等	吉田悟郎『自立と共生の世界史学―自国史と世界史』、青木書店、1990 年 鈴木亮『日本からの世界史』、大月書店、1994 年 三橋広夫『韓国・台湾に向き合う授業』、日本書籍、1999 年 二谷貞夫編『21 世紀の歴史認識と国際理解』、明石書店、2004 年 鬼頭明成『国境を越えた日本史の授業』、教育史料出版会、2007 年		

ゼミナール概要

キーワード：歴史教育　歴史認識　地域と世界　授業方法

目的と内容：歴史教育は、ややもすると独りよがりの国民意識に寄りかかり、教科書や教師の内在化された論理を子どもたちに押しつけがちです。戦前の「国史」教育はその最たるものでした。戦後の日本は、帝国の遺産を清算することなくひたすら国民意識を追い求め、その結果、アジアの人びとの思いに気づくことがありませんでした。冷戦構造の中でアメリカとの関係から自らの立ち位置を決めるという発想は、明治以来の脱亜意識を省みることなく、そのまま続けていくことを表しました。鎖国／開国論はそのよい例といえます。開国論は、近代化を余すところなく美化します。近代化することが自明であるかのような錯覚を私たちに与えます。その開国論を支えるのが、江戸時代＝鎖国という論理です。「江戸時代に鎖国をしていたので世界に遅れをとった」という強迫観念は近代への憧れをつくりだし、開国＝近代化されていないアジアは取るに足らないという意識を「日本国民」に強烈に植え付ける役割を果たしました。

一方で、グローバル化の進展は世界の各地でナショナリズムを喚起します。林志弦（イムジヒョン）がいみじくも表現したように、ナショナリズムは常に「敵対的な共存関係」をつくり出します。こうした現在をどう認識するかは、歴史意識と裏表の関係にあると言ってよいでしょう。例えば、韓国には 1982 年の教科書問題から発して韓国の人びとの募金でつくられた独立記念館があり、日帝時代（植民地時代）の日本の蛮行を展示しています。そして、日本の高校でも修学旅行などでここを訪れ、植民地の、いわば負の歴史を理解させようとする取り組みがあります。しかし、この記念館は全斗煥（チョンドゥファン）政権下でつくられ、あくまでも「力の論理」を韓国国民に注入することを目的としていました。とすると、私たちが 1980 年の光州（クァンジュ）民主化運動をどうとらえてこの博物館に日本の高校生を連れていくのかが問われることになります。全斗煥こそ光州虐殺の指導者だったからです。

ナショナリズムを克服し、近代国民国家の論理を乗り越えて、世界の平和に貢献することをねらいとする授業も散見されます。しかし、そうした教師の思いが強いほど一方的に教師の思いを伝える授業となる傾向があります。ここに大きな矛盾があります。伝達式の授業は近代教育の中でつくられ、したがって「国民づくり」の教育にふさわしい方法でした。国民国家の論理をうち破ろうとする内容をその論理を補強する方法で実践することはできません。そこで、新しい授業の枠組みとその授業を支える思想を構築しなければならないことになります。その授業は、教師と子どもたちが紡ぎ出す、きわめて個性あふれる作業です。そのため実践的に取り組もうとすれば、内容・教材・方法・子どもたちの意識などを総合的に考えなければなりません。時には、子どもたちの意識が授業の内容をも決定することがあります。

方法：個人またはグループでいくつかのテキストを読み、それにコメントをしていきます。そのコメントこそが問題意識を鍛えるものですから、じっくりと取り組んでください。

担当教員からのメッセージ

上は私の問題意識の一端を述べただけです。みなさんは、今の世界を歴史的にどうとらえ、そしてどのように授業を実践していけばよいかを具体的に考えることが必要です。自分なりの問題意識からそれぞれがテーマを設定し、他の学生の問題意識や視点を学びつつ、歴史教育について考えていきましょう。